

資料

がん患者に対するアピアランスケアの国内研究の実態

松本智里^{1§}, 今方裕子¹

要 旨

がん患者に対するアピアランスケアの実態を文献検討によって明らかにし、アピアランスケアの分野で今後必要な研究課題を提言した。看護師が行うアピアランスケアの実態として、アピアランスケアを患者の個性に合わせて実施している看護師がいる一方で、ケアの内容が標準化されていないことで支援内容や方法に迷う看護師もいた。アピアランスケアの効果の研究はほとんど報告がなかった。看護師は多職種連携の必要性を認識していたが、現場での実施を困難であると報告したものもあった。看護師以外が行うアピアランスケアの実態は、理美容師の報告に限られていた。アピアランスケアは個々の患者の苦痛に合わせて行うものであるという認識や、基本的な知識や技術を教育・周知していくような研修プログラムの開発、アピアランスケアの効果のアウトカムの一般化、多職種連携の困難の要因の明確化、多職種への研修会の構築などが今後の研究課題であると示唆された。

キーワード アピアランスケア, 文献検討

1. はじめに

近年、がん治療は通院治療で行われることが多くなっており、がん患者は治療と仕事を両立させながら、社会生活を送っている。なかでも、がん化学療法は、脱毛や皮膚症状、爪の変化など外見の変化を伴う症状を生じさせることがあり¹⁾、がん患者にとってそれらが苦痛であることが報告されている²⁾。がん患者は、脱毛した自分の姿を情けなく感じたり³⁾、自分の変化を受け入れられなくなったりしていた⁴⁾。さらに、自分が感じる外見の変化だけでなく、仕事の相手や仲間が脱毛した自分の姿を見て気を使ったり、不快に思ったりしないように周囲に気配りをするといった、社会生活での困難感も報告されている⁵⁻⁸⁾。また、がん患者は予想以上に脱毛する自分の姿を見て、これほどの影響をもたらす薬剤を使わざるをえない疾患に自分が罹患したことを、強く認識させられていたとの報告があった⁹⁾。脱毛以外にも、皮膚障害で外見の変化が出現した患者が、外見の変化を人目に曝されることに怖さを感じながら生活していたことを報告されていた¹⁰⁾。さらに、外見の変化はボディイメージやうつ病、心理社会的な健康に関連することも報告されている¹¹⁾。したがって、脱毛や皮膚症状などの外見の変化に起因する苦痛は、がん患者の心理・社会面に及ぼす影

響が大きく、がん患者の社会生活を困難にさせていると言える。がんに罹患したとしても、患者が社会生活を円滑に営んでいけるように、支援されることは重要である。

がん患者の外見の変化に起因する苦痛に対する支援は、アピアランスケアと言われている。アピアランスケアとは、国立がん研究センター中央病院内の外見関連患者支援チームによって作られた造語であり、「医学的・整容的・心理社会的支援を用いて、外見の変化を補完し、外見の変化に起因するがん患者の苦痛を軽減するケア」¹²⁾と定義されている。アピアランスケアとして行われる行為は、「実際的な外見の加工への支援のみならず、外見の変化に関わる本人の認知の変容を促進することであり、必ずしも変化する前の外見に戻すことではない」¹³⁾とされている。

アピアランスケアは2012年から周知され始めた概念¹³⁾であり、比較的新しい分野であると言える。そのため、アピアランスケアの実態やその効果についての研究は、発展途上であることが予想される。アピアランスケアは医療現場だけにとどまらず、美容専門家や企業と産学連携を期待できる可能性がある分野であり、アピアランスケアの研究の課題を明らかにすることはこの分野をさらに進展させるために重要であると考えた。

そこで、本研究の目的は、がん患者に対するアピアランスケアの実態を文献検討によって明らか

¹ 石川県立看護大学
[§] 責任著者

にし、研究的な知見を統合することで、アピランスケアの分野で今後必要な研究課題を提言することとした。

2. 方法

2.1 文献の採択基準と検索

データベースは医学中央雑誌 web (ver.5) を用いた。検索式は、〈アピランス／身体的外見〉〈ケア〉、〈アピランス／身体的外見〉〈がん〉、〈アピランス／身体的外見〉〈がん〉〈ケア〉とした。文献の選定条件は、がん患者に対するアピランスケアの内容が記載されている原著論文とした。除外条件は、外見変化に関する研究ではないもの、アピランスケアの対象者ががん患者ではないもの、商業誌による特集、解説、総説、会議録、レターとした。

2.2 文献選定のプロセス

データベースにおいて、発行年は指定せずに2020年7月30日時点までに報告されている原著論文を検索したところ、105件抽出された。重複していた20件を除いた85件を前述の選定条件を用いてスクリーニングを行った。スクリーニングは、全てのタイトルおよび抄録または本文を確認し、選定条件を満たさない71件を除外した。次に14件の本文を精読し、アピランスケアの内容が具体的に記載されていない7件を除外し、最終的に7件を文献検討の対象とした。

2.3 データ分析方法

共同研究者と2人で文献検討を行い、以下の点に注目しながら分類を行った。

- (1) 看護師が行うアピランスケア
- (2) 看護師以外が行うアピランスケア

3. 結果

3.1 対象文献の概要

最終的に選定された7件のうち、看護師が行うアピランスケアの実態が記載されているものが5件¹⁴⁻¹⁸⁾あり、2017年から2019年までの報告であった。看護師以外が行うアピランスケアの実態が記載されているものが2件^{19, 20)}あり、2015年と2020年の報告であった。分類した対象文献を、表1に示した。

3.2 看護師が行うアピランスケアの実態

がん治療を受ける患者のケアに関わった経験が

3年以上の看護師に実施された研究¹⁴⁾では、がん治療を受ける患者へのアピランスケアとして、外見変化のリスクを見越して、患者が事前に備えることのできるように情報提供すること、外見変化の悪化予防や生活の困りごとに対応したセルフケア支援をすること、その人の価値観に合わせたケアを模索しながら、その人らしい生活を支える外見ケアをすること、多職種が連携することによる専門性を活かした外見ケアを行っていた。一律に同じケアを行うのではなく、患者の価値観や社会生活に沿うようにケアの内容を個別的に考えていた。

全国がん診療連携拠点病院に従事する看護職に対して行われた無記名自記式調査¹⁵⁾では、がん治療に伴う外見変化に対するアピランスケアの実態と課題、および看護師からの研修への要望が報告された。この研究では、アピランスケアの種類を94項目に分類し、実施している項目が多い群と少ない群の2群に看護師を分けて、それぞれの群が行っているアピランスケアの内容を明らかにしていた。実施項目が多い群が9割以上行っていたのが脱毛および再育毛する時期の情報提供、ウィッグの購入時期などであった。これらのケアは、実施項目が少ない群も半数近くが行っていた。爪や皮膚に関するケアを半数以上行っていたのは、実施項目が多い群のみであった。それに対し、眉毛・睫毛の脱毛ケアの頻度は頭髪に対して低く、つけ睫毛やアートメイクに関するケアはどちらの群も行っている割合が低かった。実施項目が多い群は、アピランスケアの手引きを用いたり、理美容専門家と共同したりして、積極的に情報を活用していた。一方で実施項目が少ない群は、アピランスケアの研修を受講したことがないことなどが要因として示されていた。また、アピランスケアに関する課題として、医療従事者が行うメイクアップの必要性を疑問に感じるなど、医療者によってアピランスケアへの認識が異なることや、支援内容が標準化されていないこと、医療職種間や理美容師との連携が難しいこと、研修会の少なさなどが挙げられ、看護師はアピランスケアの支援内容や方法に迷っていることも報告されていた。

がん治療を受ける患者へのアピランスケアに関する看護師の認識、支援の必要性と自信、およびその関連要因が報告された研究¹⁶⁾では、看護師はアピランスケアの必要性を高く認識しているが、そのケアを行う自信はあまりないことが報

表1 対象文献の概要

	著者	対象者の特徴	研究デザイン	研究目的 (明らかにしたこと)	結果
看護師が行う アピ ランス ケアの 実態	飯野ら ¹⁴⁾ (2017)	看護師 21名 経験年数 16.3±5.8 年	質的	看護師によるがん治療を受ける患者への外見変化に対するケア	外見変化のリスクを見越して備えるための情報提供, 外見変化に対応した生活を送るためのセルフケア支援, 患者の意思に寄り添いその人らしい生活を支える外見ケア, 多職種連携による専門性を活かした外見ケア, の4つのカテゴリーで構成された.
	飯野ら ¹⁵⁾ (2019)	看護師 726名 経験年数 19.3±7.7 年	量的	がん治療を受ける患者に対する看護師のアピランス支援の実態と課題および研修への要望	アピランス支援を94項目に分類して調査したところ, 94項目中93項目の支援が提供されていた. 支援項目の多さの影響要因は, 多様な情報収集や支援への自信などであった. アピランス支援の課題・研修の要望として支援の標準化などがあつた.
	飯野ら ¹⁶⁾ (2019)	看護師 643名 経験年数 19.2±7.6 年	量的	看護師のがん患者へのアピランス支援に関する必要性の認識と自信, およびその関連要因	アピランス支援を脱毛の手技・説明や情報提供など26項目に分類して調査したところ, すべての項目で必要性の認識は高く, それを行う自信は低かった. 自信がある人の要因は資格や, 所属先, 研修受講歴, 専門的な書籍の活用だった.
	長谷川ら ¹⁷⁾ (2018)	—	事例 研究	がんによる外見変化がある患者の手術の意思決定支援の事例を振り返り, 具体的な看護ケアの示唆を得る	アピランスケアの情報提供と実施により, 患者はがんによる外見変化を隠せる方法があるうちは手術をしないという選択ができた. アピランスケアが意思決定支援の1つの手段となった.
	金芳 ¹⁸⁾ (2018)	—	事例 報告	アピランスケアの多職種チームの啓蒙活動によるアピランスケアの認知度と利用者の実態	多職種チーム(病棟看護師, 理学療法士, 薬剤師)を結成し, アピランスケアの啓蒙とウィッグ試着室の周知を行った結果, 認知度が上昇し, 利用者数が増加した.
看護師以外が行うアピランスケアの実態	高階ら ¹⁹⁾ (2020)	理美容師 338名 (経験年数の記載なし)	量的	地域の理美容師のがん患者へのサービス内容と, 困難な点	がん患者へのサービス内容には, ファッション・医療用ウィッグの試着・販売・カット, 皮膚変化に対するメイクアップなどがあつた. 病気や余命の話題への対応, 医学的に正しいサービスかわからない, などが困難な点として挙げられた.
	藤間ら ²⁰⁾ (2015)	理美容師 118名 勤続年数 18.6±13.2 年	量的	がん診療連携拠点病院内に理美容室のがん患者への外見支援の実態	脱毛前のヘアカットやウィッグの調整などのケアを行っており, 患者から外見変化やケアの質問を受ける機会も多かった. 医療と連携した体系的な協力や情報提供はほとんど行われておらず, そのような研修の機会を希望していた.

告された。頭髮の脱毛に関するケアは自信があるが、頭髮以外の睫毛や眉毛に対するケアの自信は低かった。スキンケアに関するケアは約6割が自信があると答えていたが、メイクアップに関する情報提供に自信があると回答した人は2割程度であった。アピアランスケアの自信の要因としては、看護師の資格や所属先、研修受講歴、専門的な書籍の活用などがあつた。

長谷川ら¹⁷⁾は、看護師が行うアピアランスケアの効果について報告していた。その中で、顔に腫瘍のある患者が手術を受けるかどうかの意思決定支援としてアピアランスケアを用いた事例が報告されていた。この事例では、アピアランスケアの情報提供および実施が、隠したいときに腫瘍を隠せる手段があるうちは、手術をせずに生きがいを楽しみたい、という患者の意思決定の後押しとなっていた。

また、看護師が多職種チームと協働してアピアランスケアを周知するための活動を報告している研究¹⁸⁾もあつた。この研究では、緩和ケアチームに参加しているスタッフを中心に、病棟看護師、理学療法士、薬剤師とチームを作り、患者・病棟看護師に対しアピアランスケア啓蒙とウィッグ試着室の周知をすることで、アピアランスケアを広く提供する機会を増やしていた。ポスターの掲示やパンフレットの作成、研修会の実施によって、病棟看護師のウィッグ試着室の認知度や患者の利用件数が上昇していた。多職種をチームメンバーにすることで、各専門性を活かした意見交換の場も設けられたことが述べられていた。

3.3 看護師以外が行うアピアランスケアの実態

地域の理美容院でがん患者へ提供されているサービスや提供可能なサービス、そのサービス提供の困難などを明らかにした研究¹⁹⁾では、店舗で提供できるサービスには、ファッションウィッグや医療用ウィッグの試着・販売、ウィッグのカット、がん治療に伴う皮膚変化に対するメイクアップ、爪保護のためのケアなどがあつた。がんを経験した方への接客に対する困難感としては、気分の落ち込みを表出されたり、泣き出したりされた時の対応への悩みや、治療中に提供する理美容サービスが医学的に正しいかといった悩みなどがあつた。

がん診療連携拠点病院の院内理美容室に所属する理美容師が提供している外見ケアや情報提供に関する研究²⁰⁾では、医療スタッフから脱毛前の

ヘアカットやウィッグの調整などを依頼された経験が全体の6割以上あり、患者からも外見変化やケアについて質問を受ける機会が多いことが報告された。頭髮に関わる質問については7割以上が自信があると回答していたが、メイクアップや爪の変化については2割程度しか自信があると回答されなかった。また、仕事をする上でがん患者に対する外見ケアの知識や技術が必要であると回答した人は7割以上おり、外見ケアについて学ぶ機会を希望する人が6割以上いた。

4. 考察

本研究の結果から、アピアランスケアの分野で今後必要な研究課題について考察する。

がん看護の経験が3年以上の看護師は、アピアランスケアは一律に同じケアを行うのではなく、その人の価値観や社会生活に合わせたケアが必要と考えており¹⁴⁾、多くのアピアランスケアを実施している看護師は、研修会や書籍を活用してケアを提供していた¹⁵⁾。これらから、アピアランスケアを実践している看護師は、基本的な知識・技術を身に着けたうえで、患者の個別性に合わせて応用させているのだと考えられる。その一方で、アピアランスケアはその内容が標準化されていないことなどから、支援内容や方法に迷う看護師がいることも報告されている¹⁵⁾。マニュアル化が難しいアピアランスケアを、どのように教育・周知していくかを検討した研修プログラムなどの開発が今後の課題であると言える。また、看護師が自信がないアピアランスケアとして挙げていた項目に、皮膚変化や睫毛・眉毛のケア、メイクアップが挙げられており、医療従事者が美容に関わる必要性に対する疑問もあげられていた。藤間²¹⁾は「アピアランスケアが必要としているのは、ビューティではなくがんとともに生きるサバイブのための技法であり、カバーやカモフラージュの結果、審美的に向上することはあるものの、それが目標とはされない」と述べている。アピアランスケアは患者の美容のためではなく、患者ががんサバイバーとして生きるための援助であるという認識も普及させていく必要があると考えられる。

アピアランスケアの効果を明らかにした研究は、アピアランスケアによって外見の補填だけでなく手術に対する意思決定支援にもなったという報告¹⁷⁾のみであつた。皮膚変化に対し、外見の変化を補うようなケアをすることでQOLが改善

するという報告²²⁾があるが、アピアランスケアは、前述の通り、「医学的・整容的・心理社会的支援を用いて、外見の変化を補完し、外見の変化に起因するがん患者の苦痛を軽減するケア」¹²⁾と定義されている。何を苦痛とするのか、ということはある患者によって様々である。そのため、アピアランスケアの効果のアウトカムを一般化するまでに導くには、アピアランスケアを受けた患者の思いや経験について記された文献を検討することや、質的研究として1人1人の体験をまとめ上げていくことが必要だと考えられる。

アピアランスケアにおいて、多職種と専門性を活かして連携することの必要性が報告されている^{15, 16, 18)}。しかし、実施しているアピアランスケアが少ない看護師は、多職種連携が困難であると報告していた¹⁵⁾。看護師にアピアランスケアにおける多職種連携を困難と感じさせている要因は何かということ、今後明らかにしていく必要がある。堀田ら²³⁾は、医療従事者の職種によって、アピアランスケアに対する意識に差があることを報告した。このような意識差が、多職種連携を困難にさせる要因になっている可能性もあると考えられる。

看護師以外の職種のアピアランスケアの報告では、理美容師が行うアピアランスケアの報告が2件あった^{19, 20)}。これらの報告から、看護師だけでなく、理美容師もアピアランスケアの研修会の機会を望んでいることが分かった。野澤ら¹³⁾は、アピアランスケアを行うと医療の領域とは異なる職種や企業とのコミュニケーションを求められることがあるが、アピアランスケアの意義や目標をしっかりと説明し、理解と協働を求めることが必要であると述べている。多職種に向けた研修をどのように運営し、アピアランスケアにおいて、それぞれの職種に求められる役割をどのように周知していくかということも、今後の研究課題である。加えて、看護師以外の医療職が行うアピアランスケアの実態の報告はなかった。看護師が多職種協働をコーディネートしていくためには、他の医療職のアピアランスケアに対する認識や、アピアランスケアにおいて職種による専門性をどのように活用できると考えているかといった認識も調査する必要があると考える。

5. まとめ

本研究により、アピアランスケアの実態が明らかとなった。これに基づき今後の研究課題を提言

した。

- ・看護師はアピアランスケアの知識や技術を、研修会や書籍を活用して修得し、それを患者の個別性に合わせて実施していた。その一方で、アピアランスケアの内容が標準化されていないことで支援内容や方法に迷う看護師もいた。アピアランスケアは個々の患者の苦痛に合わせて行うものであるという認識を周知させ、基本的な知識や技術を教育・周知していくような研修プログラムの開発が必要である。
- ・アピアランスケアの効果の研究はほとんど報告されていない。個々の患者の苦痛に向き合うアピアランスケアの効果のアウトカムを一般化するためには、患者の様々な思いや経験を文献検討や質的研究でまとめ上げていく必要がある。
- ・多職種連携の必要性は報告されているにも関わらず、それを看護師は困難であると報告しているものもあった。多職種連携の困難の要因を明らかにする研究が必要である。
- ・看護師以外が行うアピアランスケアの実態の報告は、理美容師の報告しかなかった。理美容師からは、研修の要望が挙げられていたため、アピアランスケアの意義や目標を踏まえた研修を構築していく必要がある。さらに、多職種協働をコーディネートしていくために、看護師以外の医療職者のアピアランスケアに対する認識を明らかにする必要がある。

謝辞

本研究は2019年度学内研究助成を受けて実施した。

利益相反

なし

引用文献

- 1) Lacouture ME: Dr. Lacouture's Skin Care Guide for People Living with Cancer. Harborside Press, New York, 2012.
- 2) Nozawa K, Shimizu C, Kakimoto M, et al.: Quantitative assessment of appearance changes and related distress in cancer patients. *Psychology-Oncology*, 22, 2140-2147, 2013.
- 3) 濱田麻美子, 大路貴子, 福井玲子, 他3名: がん化学療法により脱毛を経験した壮年期男性の思いと対処行動. *神戸市看護大学紀要*, 11, 19-26, 2007.
- 4) Ishida K, Ishida J, & Kanda K: Psychosocial

- reaction patterns to alopecia in female patients with gynecological cancer undergoing chemotherapy. *Asian Pacific Journal of Cancer Prevention*, 16(3), 1225-1233, 2015.
- 5) Nozawa K, Tomita M, Takahashi E, et al.: Distress from changes in physical appearance and support through information provision in male cancer patients. *Japanese Journal of Clinical Oncology*, 47(8), 720-727, 2017.
- 6) 元井好美, 掛橋千賀子: 外来化学療法を受ける初発乳がん患者の就労上の困難と対処. *日本がん看護学会誌*, 32, 137-147, 2018.
- 7) 小西玲奈, 秋元典子: がん薬物療法に起因する脱毛が発現した成人男性患者の職場復帰時の感情・考え・対処. *日本がん看護学会誌*, 30(1), 64-72, 2016.
- 8) 野澤桂子, 藤間勝子, 清水千佳子, 他1名: 化学療法により乳がん患者が体験する外見の変化とその対処行動の構造. *国立病院看護研究学会誌*, 11(1), 13-20, 2015.
- 9) 森恵子, 三原典子, 宮下茉莉, 他6名: がん化学療法に伴う脱毛体験が患者の日常生活へ及ぼす影響. *The Journal of Nursing Investigation*, 11(1,2), 14-23, 2013.
- 10) 八木橋喜代子, 佐藤直子, 太田千草: 抗EGFR抗体薬を投与されている大腸がん患者の皮膚障害に対する思い—外見変化をきたした患者のQOL維持をめざして—. *青森市民病院医誌*, 21(1), 57-65, 2018.
- 11) Choi EK, Kim IR, Chang O, et al.: Impact of chemotherapy-induced alopecia distress on body image, psychosocial well-being, and depression in breast cancer patients. *Psycho-Oncology*, 23, 1103-1110, 2014.
- 12) 国立がん研究センター中央病院: アピアランス(外見)ケアとは? .
<https://www.ncc.go.jp/jp/ncch/division/appearance/010/index.html> (accessed 2021/9/9)
- 13) 野澤桂子, 藤間勝子: 臨床で活かすがん患者のアピアランスケア, 第1版第1刷, 南山堂, 2017.
- 14) 飯野京子, 嶋津多恵子, 佐川美枝子, 他10名: がん治療を受ける患者への外見変化に対するケア: がん専門病院の看護師へのフォーカス・グループインタビューから. *Palliative Care Research*, 12(3), 709-715, 2017.
- 15) 飯野京子, 長岡波子, 野澤桂子, 他7名: がん治療を受ける患者に対する看護師のアピアランス支援の実態と課題および研修への要望. *Palliative Care Research*, 14(2), 127-138, 2019.
- 16) 飯野京子, 長岡波子, 野澤桂子, 他5名: がん治療を受ける患者へのアピアランス支援に関する看護師の認識—支援の必要性和自信およびその関連要因. *国立病院看護研究学会誌*, 15(1), 2-14, 2019.
- 17) 長谷川友美, 稲田ゆかり: アピアランスケアを通じた意思決定支援の関わり. *福島県農村医学会雑誌*, 58(1), 70-72, 2018.
- 18) 金芳佳子: 多職種協働によるQC活動を取り入れたアピアランスケア. *旭中央病院医報*, 40, 90-92, 2018.
- 19) 高階淳子, 眞壁幸子, 安藤秀明, 他2名: 地域の理美容院によるがん患者へのアピアランスケアの現状と課題. *医療の広場*, 60(1), 30-32, 2020.
- 20) 藤間勝子, 野澤桂子: 理美容師が提供・発信するがん治療に伴う外見変化に対する支援の現状—全国がん診療連携拠点病院内に設置された理美容室を対象にした質問紙調査—. *皮膚と美容*, 47(1), 2-6, 2015.
- 21) 藤間勝子: がん治療による外見変化とその支援としてのアピアランスケア. *Aesthetic Dermatology*, 29, 1-9, 2019.
- 22) 渡邊郁子, 檜垣祐子, かづきれいこ, 他1名: 容貌の問題を抱える女性のQOLとリハビリメイク®の有用性の検討—第1報—. *精神科*, 18(3), 369-376, 2011.
- 23) 堀田善宇, 河原ノリエ: アピアランスケアにおける職種別の意識差—「アジアのがん患者に対する化粧支援についてのがん医療従事者意識調査」の分析を考察して—. *社会デザイン学会学会誌*, 12, 40-49, 2020.

The State of Domestic Studies on Appearance Care for Patients with Cancer

Chisato MATSUMOTO, Yuko IMAKATA

Abstract

Through a literature review, we elucidated the state of appearance care for patients with cancer and proposed future study topics essential to the field of appearance care. Although some nurses provide appearance care to the patients according to their individuality, others continue to struggle with the contents and methods of the required support due to the lack of care standardization. Studies reporting on the effect of appearance care are scarce. Nurses acknowledge the need for multidisciplinary collaboration; however, they also report the implementation of such collaborations to be difficult onsite. Reports on appearance care provided by professionals other than nurses were limited to beauticians. Future research should include the recognition of the need of tailoring appearance care to suit the individual patients' suffering caused by the changes in their appearances of each patient, development of training programs for the learning and dissemination of basic knowledge and skills, generalization of the outcomes of the effects of appearance care, clarification of the causes that make multidisciplinary collaboration difficult, and provision of workshops for various occupations.

Keywords appearance care, literature review